

Educational outreach program featuring local Buddhist statues in art museums. : Possibilities of cross-curricular learning centered on collaboration between art museums and schools.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島口, 直弥, 芳賀, 正之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00029267">https://doi.org/10.14945/00029267</a>

## 美術館における地域の仏像を取り上げた教育普及プログラム

—美術館と学校の連携を軸とした「教科等横断的な学び」の可能性—

Educational outreach program featuring local Buddhist statues in art museums.

Possibilities of cross-curricular learning centered on collaboration between art museums and schools.

島口 直弥<sup>1</sup>、芳賀 正之<sup>2</sup>

Naoya SHIMAGUCHI, Masayuki HAGA

（令和4年11月30日受理）

### ABSTRACT

In this paper, after clarifying the results and problems of the educational dissemination program on the theme of Buddhist statues handed down in the region, which was practiced at the Mihotoke exhibition, I will discuss the Buddhist statues handed down in the region from the perspective of "learning across subjects". I would like to propose educational programs, unit concepts, and education programs at museums centered on collaboration between museums (curators) and schools (teachers).

### 1. はじめに

筆者は平成 30 年度から浜松市美術館に学芸員として勤務している。前職は小学校教員であり、学校での教育活動の経験や見識を生かし、展覧会の企画・運営の傍ら、学校を対象とした教育普及プログラムの開発と実践を継続してきた。その中で、学校（教員）の美術館利用のねらいを子供の発達段階や実態、育みたい資質・能力等の側面から把握し、学校（教員）の要望に寄り添った教育普及プログラムを柔軟にカスタマイズすることが、学校の美術館活用を促す要素の一つであることを確認した。<sup>1)</sup> また、学校の美術館利用は、主に小・中学校の図画工作・美術科の学習、中学校・高等学校の部活動における美術作品の鑑賞を目的としたものが多いが、総合的な学習の時間や特別活動（遠足、校外学習等）の活動における美術館利用が一定数ある。図画工作・美術科の「造形的な見方・考え方」に加え、他教科・領域の多様な「見方・考え方」から美術作品にアプローチする教育普及プログラムの開発にニーズがあることが分かった。<sup>2)</sup>

小学校教員時代、筆者は図画工作科や他教科・領域の学習で習得した知識や技能を総合的な学習の時間の探究課題の解決に活用する「教科等横断的な学び」に関する単元を構想し、実践を重ねてきた。子供たちは「環境」や「歴史」等の課題解決に向けた探究の過程（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）において、他教科・領域の様々な「見方・考え方」を働かせる。「教科等横断的な学び」は、各教科・領域で育むべき資質・能力を、相互に関連付けながら働かせることで、それらを往還的に育むことにつながる。<sup>3)</sup>

<sup>1</sup> 浜松市教育委員会・浜松市美術館

<sup>2</sup> 美術教育系列

そこで、美術館において、展覧会の特性や展示作品に応じて、図画工作・美術科に加え、他教科・領域の学習を含めた「教科等横断的な学び」を意識した教育普及プログラムを開発し、教科・領域ごとの資質・能力と共に、それらの共通項となる資質・能力を相互に育むことができれば、<sup>4)</sup> 学校の美術館利用のさらなる可能性の広がりにつながるのではないかと考えた。

本論で注目したのが、地域に伝わる仏像である。筆者は、令和3年3月、遠州地域に伝わる仏像を一堂に展示した企画展「みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展」(以下「みほとけ展」)を企画・運営し、遠州・三河地域に伝わる平安・鎌倉・南北朝時代の仏像に関する研究を継続している。<sup>5)</sup> 子供たちは仏像の彫刻作品としてのよさや美しさに図画工作科・美術科の「造形的な見方・考え方」を通して、制作の歴史的背景や意義に社会科の「社会的な見方・考え方」を通して触れることができる。また、地域に伝わる仏像に焦点を当てることで、地域の神社仏閣、美術館や博物館において実物と対峙する機会を保障しながら、総合的な学習の時間や特別活動を要とした「教科等横断的な学び」を意識したプログラム開発が可能であると考えた。<sup>6)</sup>

仏像の教材開発に関する研究はこれまでも広く行われており、各教科の教科書や副読本には、それぞれの教科の「見方・考え方」から仏像が教材として扱われている<sup>7)</sup>。しかし、複数の教科・領域から、仏像について多面的・多角的に迫る教材や単元構想の開発に関する研究・実践は多くはない。また、先行研究で教材化された仏像は古都に伝わる国宝・重要文化財級のものが多く、各地域に伝わる仏像を対象としたものは少ない。<sup>8)</sup> 本論では、みほとけ展にて実践した地域に伝わる仏像を主題に据えた教育普及プログラムの成果と課題を明らかにした上で、地域に伝わる仏像に関する「教科等横断的な学び」の視点での教材化や単元構想、美術館と学校の連携を軸にした美術館における教育普及プログラムの可能性を提案したい。

## 2. 遠州地域に伝わる仏像の教材化の意義

日本の彫刻史において、近世以前に制作された作品のほとんどが仏像(神像)であり、それらは日本人に馴染深い彫刻作品といえる。大陸から伝播した仏教文化は都で繁栄を極め、都と地方を結ぶ人的・物的な流れによって、全国各地へと伝播する。摩訶耶寺(浜松市北区)の千手観音像(10世紀)は、一木造りであること、脚部に翻波式衣文が見られること等、正統的で古様な造りが見て取れる。応賀寺(湖西市)の阿弥陀如来像(12世紀)や西楽寺(袋井市)の阿弥陀如来像(12世紀)は、平等院鳳凰堂(京都府宇治市)の阿弥陀如来像(11世紀)の作者である定朝が確立した様式に忠実に従う。細かく整えられた螺髪、穏やかな表情、薄く平坦な体躯、浅く流麗な衣文は、貴族全盛の平安時代において「仏の本様」とされ、全国各地でその様式の仏像が制作された。岩水寺(浜松市浜北区)の地藏菩薩像(13世紀)は、慶派仏師・運覚の手によるもので、全国に50軀余りが現存する裸形着装像の一例である。像内からは造像記、扇や笛等の納入品が発見された基準作である。方広寺(浜松市北区)の釈迦如来像(14世紀)は、院派仏師・院吉、院広、院遵の手によるもので、大小の箱を積んだような俯き加減な体躯、うねるような脚部の衣文等、南北朝時代の流行が顕著である。遠州地域に伝わる仏像は、都で流行した様式を正統的に受け継ぐものが多いことが伺え、一木造りや翻波式(10世紀)、定朝様式(11~12世紀)、慶派(13世紀)、院派(14世紀)と、10世紀以降の日本彫刻史の変遷を、古都へ行かずして辿ることができる。以上をふまえ、遠州地域に伝わる仏像を、小・中学校の各教科・領域の学習にどのように落とし込み、どのような意義を見出せるかについて、学習指導要領(平成29年告示・「解説」を含む)の主な記述と照らし合わせて確認したい。

## (1) 図画工作科・美術科

小学校図画工作・第5学年及び第6学年の内容「B鑑賞」(1)アにおいて、鑑賞対象の1つに「我が国や諸外国の親しみある美術作品」とあり、それらを「国や地域、文化、時代、風土、作者の個性などが関わって創造され、固有のよさや美しさを醸し出している美術作品のこと」と示している。<sup>9)</sup> 中学校美術・第2学年及び第3学年の内容「B鑑賞」(1)イ(イ)において、「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質」とあり、それらを「日本の美術の大まかな流れと表現の特質、作品に見られる各時代の人々の感じ方や考え方、作風など」と示している。<sup>10)</sup> 平安・鎌倉時代という古の時代に制作された彫刻作品のほとんどが仏像(神像を含む)であり、子供たちの身近な地域にも広く伝わっていること、日本の仏像は、その風土が育む文化の影響、各時代の人々の感じ方や考え方によって様式が移り変わることを、作者(一派)によって異なる個性が垣間見えること等から、鑑賞の対象に相応しいものといえる。

## (2) 社会科

小学校社会・第6学年の内容(2)ア(イ)において「大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造立の様子を手掛かりに、天皇を中心とした政治が確立されたことを理解すること」、(ウ)において「貴族の生活や文化を手掛かりに、日本風の文化が生まれたことを理解すること」とある。<sup>11)</sup> (イ)については、聖武天皇の発案の下、国家的大事業として東大寺の盧舎那仏が造立された背景を理解する必要があるが、その背景は地方における仏像の造立の背景と重なる部分が多い。また、(ウ)については、藤原頼通によって造立された平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像が国風文化の象徴的存在として取り扱われる。これは全国に伝わる定朝様式のもととなった作例である。遠州地域に伝わる定朝様式の作例を併せて提示することも、子供たちの興味・関心を高めるものと考えられ、中学校社会科においても同様の手立てが有効であるといえる。

## (3) 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、学習内容について学習指導要領(小学校・中学校)に具体的な明示はない。これは「地域や学校、児童の実態に応じて、創意工夫を生かした内容を定めることが期待されている」からである。内容設定に際しては、「目標を実現するにふさわしい探究課題」を定める必要があるが、探究課題の具体例の一つに「地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々」が小・中学校に共通して掲げられている<sup>12・13)</sup>。平安・鎌倉時代といった古代・中世から地域に伝わる仏像は、その地域の伝統や文化の具体の一つである。そしてそれらは、数百年から千年の歴史の中で、中世・近世の幾多の戦乱、時の権力者・有力者の移り変わり、明治新政府による神仏分離に伴う廃仏毀釈、太平洋戦争や近年の天災等、その存亡の危機に見舞われてきた。<sup>14)</sup> そうした危機から優れた仏像が救われ、今日まで継承されてき背景には、地域や寺社等の先人の絶え間ない注力があり、その流れは未来永劫継承されるべきものである。しかし、地域の伝統や文化の未来への継承は、文化財そのものの朽損やその修復に伴う高額な費用負担、文化財所有者の後継者不足や地域住民の高齢化、加えて近年多発する文化財盗難や転売等、社会的な諸問題が複雑に絡み合い、一筋縄ではいかない。地域の仏像の継承という探究課題に子供たちが向き合い、各発達段階において可能な解決策を考えることを通して、教科等を横断した多様な資質・能力を育てていくことが可能である。<sup>15・16)</sup> 内容の取扱いについては、総合的な学習の時間を軸としながら、前述の図画工作・美術科、社会科の学習を関連付けたい。各教科の学びが往還し、それぞれの「見方・考え方」から育まれた資質・能力が有機的に連動することで、子供たちをより「深い学び」へと誘うことが可能であると考えられる。

#### (4) 特別活動

特別活動のうち「学校行事」の内容として、「遠足・集団宿泊的行事」(小学校)、「旅行・集団宿泊的行事」(中学校)があり、「(※自然の中での集団宿泊活動などの)平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること。」(※は小学校のみ)とされる。<sup>17)</sup>特に中学校では、ここで育む資質・能力の一例として「豊かな自然や文化・社会に親しむことの意義を理解する(後略)」が掲げられ、実施上の留意点として、「文化的行事(中略)との関連などを重視して、単なる物見遊山に終わることのない有意義な旅行・集団宿泊的行事を計画・実施するよう十分に留意すること。」とされる。ここでいう「文化的行事」においても、育む資質・能力の一例として「(前略)芸術的なものや伝統文化を鑑賞したりする活動に必要な知識や技能を身に付けるようにする。」「生涯にわたって、多様な文化芸術に親しむとともに、集団や社会の形成者として伝統文化の継承や新たな文化の創造に寄与しようとする態度や、己の成長を振り返り、自己を一層慎重させようとする態度を養う。」、実施上の留意点の一つとして「本物の文化や芸術に直接触れる体験を通して、情操を高め、豊かな教養の育成に資するとともに、生涯にわたって、文化や芸術に親しんだり、集団や社会の一員として伝統文化の継承に寄与しようとしたりする態度を育むこと。」と掲げられている点は見逃せない。<sup>18)</sup>全国の小中学校の所謂「修学旅行」においては、長年、奈良・京都が訪問先として定番化してきた。奈良公園周辺の興福寺や東大寺、奈良国立博物館「なら仏像館」には、国宝・重要文化財級の仏像の優品が揃い、子供たちがそれらと対峙することの意義や価値は疑いようがない。しかし、昨今のコロナ禍において、「修学旅行」の訪問先の変更を余儀なくされる自治体・学校は依然として多いことが推察される。こうした社会情勢の中、子供たちの本物の文化や芸術に直接触れる機会を保証しつつ、それらに慣れ親しむことの意義の理解を促し、伝統文化の継承に寄与しようとする態度を育むために注目したいのが、各地域に伝わる仏像等の文化財の存在である。こうした地域に伝わる古の文化財の存在は、旧都に伝わる国宝・重要文化財級の文化財を見ることの代替になり得るばかりでなく、前述の図画工作・美術科、総合的な学習の時間の学習と相互に関連させることで、特別活動として育むべき資質・能力をより効果的に育成することが可能かもしれない。また、通常中々見ることができない地域ゆかりの文化財を集め、一堂に展示する美術館・博物館を活用することも、その一助になり得るものと考えられる。

### 3. みほとけ展における教育普及プログラム

みほとけ展の会期は令和3年3月末から4月末の1か月間であった。この時期の学校現場は学年末から新年度の時期にあたり、通常学校等の団体での美術館利用は少ない。加えてコロナ禍がさらなる足かせとなり、団体鑑賞の申し込みは通常に輪をかけて少なかった。しかしながら、僅かではあるが小・中学校からの団体鑑賞の申し込みがあり、美術館を訪れた子供たちに、教育普及プログラムを実施することができた。これらの教育普及プログラムは、事前に学校側(教員)の要望や子供たちの実態(校種・学年・発達段階等)を確認したうえで、本論の柱である「教科等横断的な学び」の視点、各教科・領域において子供たちに対して仏像を教材として対峙させる意義を考慮してカスタマイズしたものである。コロナ禍で様々な制約を強いられる中での実践であり、意を尽くせない部分が多いが、実施できた取り組みについてその概要を紹介し、成果と課題を明らかにしたい。

## (1) 教育普及プログラムの内容

## ① 小学生対象の教育普及プログラム

## ア 対象

○小学校・第6学年の2学級（約60人）

## イ 学校側（教員）の要望

仏像の楽しい見方のレクチャーと仏像制作の背景を説明してほしい。

## ウ 主な内容

仏像の見方については、図画工作科の鑑賞として、表情、髪型、着衣、持物等といった造形的な要素に着目し、仏像を尊格別に主に「如来」「菩薩」「明王」「天（部）」の4つのグループに分類できることやその分類方法の視点を紹介した。仏像制作の背景については、仏像が信仰の対象として制作されるようになった時代背景（紛争、飢饉、疫病等）を、社会科で学習予定の聖武天皇による東大寺盧舎那仏の造立を例に紹介し、それと同様の動きが都から地方へと伝播し、遠州地域でも古くから造像が盛んになったことを伝えた。ただし、館内の密を避けるため、展示室内での実物を前に直接解説することは断念せざるを得ず、エントランスの看板前での事前説明に留めることとした。展示室への移動前には、図画工作科の「造形的な見方・考え方」として、造形的な要素に着目した仏像の分類の他、仏像の彫刻作品としての造形的なよさや美しさ（彫刻痕、彩色、装飾、像の大きさや迫力、存在感等）を、実物との対話で感じ取ってほしい旨を伝えた。また、社会科の「社会的な見方・考え方」として、仏像が歴史的な事象を背景に先人たちの願いや篤い信仰心によって生み出され、数百年から千年の時を今日まで保存・保護されてきたことを想起しながら仏像と対峙してほしい旨を伝えた。

子供たちは展示室内を自由に周り（図1）、仏像の分類や役割、印相や持物、髪型や着衣等、仏像への興味・関心を高める「豆知識」を短文で整理した簡易解説（図2）を読みながら、メモをとって仏像を鑑賞した。仏像をひとと見つめ造形的なよさや美しさを味わったり、仏像の分類、印相や持物について友達と対話したりと、鑑賞時間一杯を使ってじっくりと仏像と対峙する子供たちの姿が見られた。友達や作品と対話しながら、主体的に仏像と対峙する子供たちの姿から、子供たちの仏像への興味・関心の高まりが垣間見えた。

○小学校長（当時）によれば、子供たちは美術館から学校までの帰路、鑑賞した仏像の面白さについて、友達同士で主体的に対話を継続していたという。また、こうした子供たちの意欲的な姿や主体的な対話の内容から、「実物を見たことで、故郷の貴重な文化財の存在を大切にしていかなければならないという思いが高まり、学びが深まったようだ。」と振り返っている。<sup>19)</sup>



図1 仏像を鑑賞する小学生

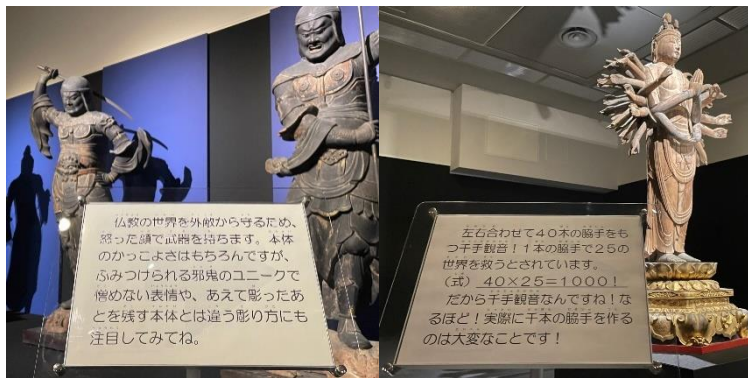


図2 展示室内に設置した簡易解説（一部）

② 中学生対象の教育普及プログラム

ア 対象

H 中学校・第2学年の4学級（約120人）

イ 学校側（教員）の要望

古都研修での仏像鑑賞の事前指導を、コロナ禍を考慮してリモートで実施してほしい。

ウ 主な内容

美術館と中学校の4学級を Zoom で繋ぎ、スライドをもとにプログラムを進めた。序盤は小学校第6学年、中学校第1学年で学習する奈良時代、平安時代の歴史的事項を振り返りながら、法隆寺釈迦三尊像や東大寺盧舎那仏等を例に、仏像が制作される背景について社会科の「社会的な見方・考え方」からアプローチした。続いて、仏像の尊格（如来・菩薩・明王・天（部））とその特徴を紹介した後（図3）、みほとけ展に出陳した複数の仏像の画像を示し、どの尊格であるかを考えるクイズを出題した。また、古都研修のコースである薬師寺、東大寺、蓮華王院（三十三間堂）の仏像の中から、奈良、



図3 如来の印相に挑戦する中学生

平安、鎌倉時代の作例を取り上げ、各時代によって異なる材質や技法、様式等の特徴とその変遷を紹介し、美術科の「造形的な見方・考え方」からの仏像鑑賞の醍醐味を紹介した。最後に、古都研修が特別活動の一環であることをふまえ、みほとけ展に出陳した仏像に立ち返り、奈良や京都の仏像のみでなく、それと同等の価値や魅力を兼ね備えた仏像が身近な地域にも点在すること、それらを後世に継承するには、その地域に暮らす若い世代がその存在を知ることが第一歩であることを、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」の視点から投げかけた。

子供たちの学習の振り返りには、美術科はもちろん、社会科、特別活動のそれぞれの「見方・考え方」を通した言葉が混在していることが分かる。生徒Aは、『おばあちゃんの家』にある『仏像みたいなの』を想起している。造形的な要素（表情「こわい顔」と着衣「ぬのだけ」）に注目して思考し、その尊格を明王だと判断している。生徒Bは、造形的な根拠は不明だが、仏像に対し「怖いな」、「少しきみょうだ

<p>造形的な見方・考え方</p>	<p>ます。自分のおばあちゃんの家にも、仏像みたいな顔があります。こわい顔をして、ぬののだけを着ていたと思うので、たぶん明王だと思っています。この授業があったので、よりいこう古都研修が楽しくなると思います。</p>
<p>社会的な見方・考え方</p>	<p>今日の古都研修事前学習で聞いて僕は仏像は少しいメージがわいて仏像を見て「怖い顔かおどろか」と思っていたのが少し変わって、仏像に少しきみょうな感じになりました。人々のわがいで仏像が生まれたことには少しびっくりしました。</p>
<p>集団や社会の形成者としての見方・考え方</p>	<p>いふのをありました。また、病から人を救う、悔しを救い願いのせうな。仏教の世界を分断から作るのと、色々の意味で仏像にこれらです。少しびっくりしました。人々の願いや祈りが、仏像に存在する仏像を大切にしてほしい。</p>

図4 中学生の振り返り（上から生徒A・生徒B・生徒C）

な」というイメージを抱いている。「造形的な見方・考え方」に加え、「社会的な見方・考え方」から仏像造立の背景にある人々の願いに着目し、仏像への興味・関心を高めている。生徒Cは、仏像に込められた人々の願いや尊格の役割について、「社会的な見方・考え方」から着目している。加えて、「仏像を大切にしたい」という言葉には「集団や社会の形成者としての見方・考え方」が垣間見える。仏像との対峙に際し、各教科・領域の「見方・考え方」を視点として提示することで、子供たちの多様な反応を引き出すことができたものとする。仏像を各教科・領域の視点で捉えることは、「教科等横断的な学び」の具現を担保する要素の1つであるとする。

### ③ 幼稚園児対象の教育普及プログラム（参考事例）

みほとけ展では、コロナ禍で学校等の団体利用が少ない中、幼稚園児5歳児の団体鑑賞という機会を得ることができた。ここでは、幼稚園5歳児の仏像への対峙とそのアプローチ、子供たちの反応について、本論の主張や提案につながる貴重な参考事例として触れておきたい。

#### ア 対象

H 幼稚園・5歳児1学級（約20人）

#### イ 園側（教員）の要望

浜松城公園の散策の途中で美術館に立ち寄り仏像を鑑賞したい。

#### ウ 主な内容

かつて小学校1年生の西洋絵画の鑑賞において、鑑賞の足掛かりとして、モチーフとして描かれる動物に視点を絞ることに効果があったことを踏まえ<sup>20)</sup>、展示した仏像の中から長楽寺（浜松市北区）の馬頭観音像（図5）を選択した。馬頭観音像はその名の通り、頭上に馬を戴く観音像で、像本体の顔の忿怒相と温和な表情の馬の顔とのミスマッチの妙が魅力的な像である。加えて、馬でありながら犬や山羊等の他の動物とも見紛う造形の面白さも、幼稚園児の鑑賞対象として相応しいのではないかと考えた。最初に像本体の忿怒相から、馬頭観音像が醸し出す怖さや恐ろしさに注目させた。その後、「どこかに動物が隠れているよ」と投げかけ、子供たちに頭上の馬を探すように誘導した。頭上の動物彫刻の存在に気付



図5 馬頭観音像（長楽寺蔵）

いた子供たちも、その時点ではそれが馬であることには気付いておらず、「犬かな」、「馬じゃないかな」等、想像を膨らませていた。最後に頭上の動物が馬であることを説明すると「かわいい」、「どうして頭に馬が」という声が聞こえた。活動時間や子供の発達段階を加味し、馬頭観音像に関する詳細な説明は避けたが、鑑賞対象の選定と視点の提示、鑑賞活動の構成の工夫が幼稚園児の仏像の鑑賞にも有効であった。（図6）その他、釈迦如来像の印相を体験したり、薬師如来像に手を合わせてコロナ収束を願ったり（図7）、体を動かしながら仏像の祈りの造形に慣れ親しむことができた。幼児もその発達段階に応じた仏像との対峙とそのアプローチの工夫を通して「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に触れ、長い歴史の中で育んできた文化や伝統の豊かさに気付くこと」<sup>21)</sup>が可能であることを子供たちの姿から再確認した。



図6 馬頭観音像を鑑賞する幼稚園児



図7 薬師如来像に手を合わせる幼稚園児



## (2) 教育普及プログラムの成果と課題

### ① 成果

全方位からの鑑賞で仏像の寸法や立体感を捉えること、信仰の対象としての仏像の神的・霊的雰囲気を感じ取ることは、仏像のよさや美しさ引き立てるように展示された美術館という空間<sup>22)</sup>における実物との対峙ならではの経験といえる。実物と対峙した幼稚園児と小学生は、仏像の臂や指、頭上面の亡失、虫穴や干割れに気付き、仏像が長い年月をかけて現在に伝えられてきたことを実感していた。また、仏像の彫刻作品としてのよさや美しさ、歴史的文化財としての意義や価値等について、「造形的な見方・考え方」、「社会的な見方・考え方」を働かせながらの主体的に対話していた。小・中学生は、奈良や京都の寺院に伝わるものと同時代の古い仏像や同じ様式を受け継いで制作された仏像が自分たちの暮らす地域に存在すること、それらが古都の仏像と同等の文化財指定を受けていることに関心を示していた。特に中学生は、古都研修で訪問予定の寺院の仏像を地域の仏像を関連付けることで、古都研修での仏像鑑賞の関心・意欲を高めると同時に、地域に古くから伝わる仏像の大切さに気付き、それらを守り継承していく必要性を「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせて見出す様子が見られた。

### ② 課題

本実践における仏像との対峙は、みほとけ展が開催中であったが故に可能になったものである。仏像が通常非公開の寺院、十分な鑑賞が難しい環境に仏像を安置する寺院では、活動の制約が大きいことが予想される。また、実物と対峙できたとしても、活動時間や子供の発達段階・実態に応じて、特に取り上げる作品の厳選せざるを得ないのが現状であった。さらに、仏像に対する各教科・領域の「見方・考え方」を子供たちと十分に共有できなければ、作品や友達との主体的な対話に基づく深い学びへ誘うことは難しいものと思われる。例えば、「自分たちの暮らす地域に古都と同等の価値をもつ仏像がなぜ伝わってきたのか」という「社会的な見方・考え方」からの問いは、仏像を通して、都と地方の人的・物的な移動による文化の伝播、各地域の繁栄や有力者の存在と文化の享受に関する理解を促し、ひいては子供達の地域への郷土愛を育むことにつながる可能性をも秘める。しかし、鑑賞時間や鑑賞環境等の制約で、そこを十分に思考する時間を確保できなかった。仏像と対峙することを通して育まれる資質・能力について、その共通項を検討し、限られた時間と環境の中で効率よく育むための方策の検討が不十分であった点が課題といえるが、これは、美術館内における単独の教育普及プログラムの実施に留まっている現状では、踏み込むことが難しいものと思われる。

### ③ 成果と課題をふまえて

仏像との対峙に際し、図画工作・美術科、社会科、特別活動それぞれの「見方・考え方」を働かせることが有効な視点となり得ることの可能性を指摘した上で、これらの教科・領域で育むことが可能な資質・能力の共通項を「地域（郷土）の文化（芸術・歴史）を理解し、それらに対する愛着を高め、守り伝えようとする」として見出した。この共通項は、教科・領域で分断されるものではなく、総合的な学習の時間の探究の過程を要に据えることで、教科・領域を連続的・有機的に結びつける総合的な単元の構想が可能となろう。ただし、この構想の実現には、探究の過程の継続性に合わせ、実物と対峙する機会や学術的・宗教的見地からの指導・助言を享受する機会の確保のため、美術館学芸員や寺院住職等、地域の機関や人材との継続した協力体制の構築と共通理解が不可欠と言える。また、学校と美術館・寺院との距離や予算の制約によって、頻繁な実物との対峙や関係者への直接的な取材等が困難となる状況を想定し、オンラインやICTの活用も視野に入れる必要がある。各教科・領域の学習を横断した単元を、地域の人材（美術館や寺院、その人材）の継続的な関わりが内包する形で構想することができれば、子供達に資質・能力の共通項を効果的に育んでいくことが可能ではなかろうか。

#### 4 美術館と学校の連携による地域の仏像を取り扱う学習モデルの試案

みほとけ展において断片的に実施した教育普及プログラムの内容と明らかになった成果と課題から、以下のような対象や状況を仮定して、美術館と学校の連携のもと、地域の仏像を取り扱う学習モデルの構想が可能であるかどうかを、実際に単元を構想する形で試案した。(図8)

<仮定>

- ① 対象は浜松市内の小学校6年生とする。
- ② 総合的な学習の時間の探究課題は「地域」、「歴史・文化」である。
- ③ 浜松市内の美術館では、浜松市内に伝わる平安・鎌倉時代造像の仏像を一堂に展示する企画展「なむなむ」展が開催中である。

##### (1) 学習モデルの構造

この学習モデルは、学校における総合的な学習の時間の探究課題「浜松の宝！仏像を守り伝えよう！」に対し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現というプロセスを通して、「探究的な見方・考え方」を働かせながら、仏像の継承のための解決策を具体的に考え、友達と協働して実践的に取り組んでいくことを核としている。また、探究の過程において、特別活動における諸行事を効果的に活用したり、図画工作科、社会科の習得事柄を活用したりし、各教科・領域の学習内容や育むべき資質・能力の育成を担保することに十分に留意した上でカリキュラム・マネジメントを土台とした「教科等横断的な学び」の過程を構想する。加えて、この探究の過程を、美術館（学芸員）と寺院・地域（住職等）が、「実物」の仏像と対峙する機会や専門的見地からの情報の提供等によって継続的に支える構造とする。

##### (2) 各教科・領域における学びの具体

###### ① 総合的な学習の時間と特別活動

「課題の設定」では、特別活動の学校行事「遠足・集団宿泊的行事」に位置付けた遠足で浜松市内の美術館を訪れ、開催中の仏像展「なむなむ展」（架空の展覧会）で浜松市内に伝わる重要文化財を含む仏像を鑑賞する。<sup>23)</sup> 子供たちは仏像と対峙することで、様々な疑問を抱くことだろう。それらの疑問をもとに友達と対話したり、美術館学芸員や寺院住職から仏像に関する専門的な話を聞いたりすることで、古から伝わる貴重な仏像を保護・継承するために、自分たちにできることを考え実行するという探究課題を設定する。

「情報の収集」では、探究課題に則して、仏像に関する基礎的な事項、その保護・継承に関する取り組みについて、図書資料やタブレットを活用して調べ学習を進める。また、特別活動の学校行事「遠足・集団宿泊的行事」に位置付けた修学旅行の訪問先である奈良・京都の寺院で、仏像の保護・継承の現状に関する情報を直接収集する。美術館学芸員と寺院住職は、子供たちが調べ学習を進める中でさらに疑問に感じたことについて、Zoomを活用し助言を行う。

「情報の整理・分析」では、収集した情報をもとに、情報収集の現状、情報の整理・分析の成果として、この時点で考え得る探究課題解決の具体策について整理する。特別活動の学校行事「文化的行事」に位置付けた学習発表会にて、これまでの学習の成果と今後実行予定の探究課題解決策について発表する。美術館学芸員と寺院住職を招待し、発表した探究課題解決策について助言をもらい、探究課題解決策について問題点や予想される課題を分析・修正する。

「まとめ・表現」の過程では、修正した探究課題解決策を美術館学芸員や寺院住職の助言や協力の下で実行する。活動を振り返り、その成果と課題を整理・分析し、探究課題について、改めて友達と対話しながら、最終的な自分の考えをまとめる。

なお、探究の過程は、その順序が固定化されるとは限らず、探究課題解決に向けた子供たちの必要感に応じて前後したり繰り返したりする場合があります。柔軟な取り扱いが求められること

に留意したい。また、特別活動は、単に総合的な学習の時間の探究過程に学校行事を組み込むことに留まらず、多様な文化や芸術に親しむとともに、美しいものや優れたもの、地域や我が国の伝統文化等のよさについて考えたり触れたりする等、文化的行事で育むべき資質・能力の育成を担保する側面があることに留意したい。

## ② 図画工作科

はじめに、仏像を「造形的な見方・考え方」で捉え、そのよさや美しさを味わえるようにする。子供たちは、仏像の髪型、服装、ポーズ等の造形的な要素に着目し、その特徴や意図を味わいながらイメージを膨らませ、自分なりの価値や意味を見出していく。仏像を様々な方向、高さ、角度から見て、自分が気に入った姿を見つけたり印相や姿勢を実際に真似してみたりし、仏像の造形的なよさや美しさについて、体感的に味わうことを重視する。そして、各部の名称や各時代の様式等の知識の詰め込みに陥らないよう十分配慮する。なお、仏像を実際に鑑賞する機会は、特別活動での美術館利用における「なむなむ展」の鑑賞で置き換えるものとする。

次に、鑑賞と表現をつなぐ（鑑賞と表現の一体化）題材として、廃材や粘土等のもとにオリジナルの仏像を制作する。仏像の造形要素に自分なりの意味や価値を込めながら仏像を制作することを通して、古の仏像を制作した仏師、仏像制作を発願した有力者や仏縁を求めた結縁者に思いを馳せ、仏像の鑑賞をさらに深めていく。

さらに、総合的な学習の時間の探究の過程で、仏像の存在、価値や魅力をPRする段階に併せて「仏像PRポスター」をデザイン・制作する題材を設定する。ロゴ、挿絵やイラストのデザイン、説明文と挿図のバランスを考えながら、他者に分かりやすく伝えることを重視したポスターを作成し、実際に総合的な学習の時間の探究の過程の中で活用することを目的とする。

最後に、寺院に伝わる建築や庭園等、仏像以外の文化財のよさや美しさを鑑賞する。総合的な学習の時間の「まとめ・表現」の過程では、探究課題解決策として、仏像を所蔵する寺院そのものについてもPRする必要が生じるものと予想される。その探究過程に、図画工作科の鑑賞で習得した寺院の様々な文化財のよさや美しさに関する情報を活用できるようにする。

図画工作科では、鑑賞と表現を一体とした題材を構想したり、鑑賞のみならず表現の活動をバランスよく配したりすることで、仏像の造形的なよさや美しさをより深く味わわせ、図画工作科として育むべき資質・能力の育成も担保することに留意したい。

## ③ 社会科

社会科では、仏像を「社会的な見方・考え方」で捉え、その歴史的な意味や価値について習得する。古代に天皇中心の政治が確立されたことを理解する学習で、聖徳太子との関連資料として法隆寺の釈迦三尊像、聖武天皇が仏教を尊重した国づくりを行ったことを理解する学習で、東大寺の盧舎那仏を取り上げることが考えられる。また、平安時代に日本風の文化が生まれたことを理解する学習で、藤原道長・頼通父子等の貴族の暮らしの関連資料として平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像を取り上げることが考えられる。平等院像は仏師定朝の現存唯一の真作であることを踏まえ、浜松市内に伝わる定朝様式の仏像（摩訶耶寺阿弥陀如来像、岩水寺阿弥陀如来像等）の紹介も可能である。さらに、仏像を取り上げる場面は想定されないが、室町文化の学習で金閣や銀閣を取り上げ、文化財と現在の私たちの生活とのつながりを実感させることも、総合的な学習の時間の探究課題解決策の考案の有効な視点になり得るものとする。加えて、公民的分野の国や地方公共団体の政治のしくみを学習に際し、仏像の修理や保護等の文化財行政は、国民・市民の税金で賄われていること、仏像を守り伝えたいという思いを含む国民の願いを実現するために選挙、議会（国会・市議会）等の仕組みが整えられていることを理解することも、総合的な学習の時間の探究課題解決策の考案の必要な視点であるものとする。

ただし、資料の提示や総合的な学習の時間の探究の過程との関連付けについては、社会科で

育むべき資質・能力の育成を担保するため、歴史的・公民的分野の学習事項との関連を十分に考慮し、精選する必要があることに留意が必要である。

美術館 (学芸員の関わり)	学校			寺院・地域 (所有者の関わり)
	図画工作科	総合的な学習の時間 (特別活動) 探究課題「浜松の宝！仏像を守り伝えよう！」	社会科	
<p>企画展「なむなむ展」 企画・開催</p> <p>遠州地域ゆかりの古仏を美術館に一堂に展示し、その存在、価値や魅力を広く市民に公開する。</p> <p><b>教育普及プログラム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸員講話(視点明示)</li> <li>・対話型鑑賞</li> <li>・仏像分類クイズ</li> <li>・映え写真撮影大会</li> </ul>	<p>仏像のよさや美しさを味わおう</p> <p>「なむなむ展」でみた仏像を主題に、形や色、大きさや立体感、存在感等の造形的な要素から仏像のよさや美しさを感じ取り、自分なりのイメージをもつ。</p>	<p><b>探究の過程①：課題の設定</b> <b>浜松市内の重要文化財を見てみよう！</b></p> <p><b>遠足</b>で美術館の「なむなむ展」に行こう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ古い仏像が浜松市にあるのかな。</li> <li>・昔の人はなぜ仏像をつくったのだろう。</li> <li>・誰がどうやって保管してきたのかな。</li> <li>・仏像の種類にはどんなものがあるの。</li> <li>・仏像のポーズ、持ち物、服装の意味は。</li> <li>・ずいぶん傷んでいるけれど大丈夫かな。</li> <li>・手が取れているけれど直さないのかな。</li> <li>・お寺はどんな取り組みをしているのかな。</li> </ul>	<p>大陸に学んだ国づくり</p> <p>聖徳太子の天皇中心の国づくり(作例：法隆寺釈迦三尊像)、聖武天皇の仏教による国づくり(作例：法隆寺羅舎那仏)から、人々の仏像への願いを理解する。</p>	<p>企画展「なむなむ展」 作品出陣</p> <p>寺院や地域に伝わる古仏を美術館の企画展に出陣し、その存在、価値や魅力を広く市民に公開する。</p> <p><b>講話</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寺院の歴史や仏像の由緒</li> <li>・寺院の経営や文化財保護に関する苦労</li> <li>・仏像に関する思いや願い</li> </ul>
<p>子供たちの質問への回答 Zoomを活用し、教室と美術館をオンラインでつなぎ、子供たちがさらに疑問に思ったこと、確認したいこと(主に学術的な事柄)について、回答する。</p> <p><b>修学旅行事前学習</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問寺院の主要な仏像と見所の紹介(浜松市内の仏像と比較して)</li> </ul>	<p>オリジナル仏像を制作しよう</p> <p>粘土をもとにして、様々な願いを自分なりの形や色に込め、「オリジナルの仏像」を制作し、仏像への興味・関心、愛着を高めたり、仏師や寄進者の願いを想像したりする。</p>	<p><b>探究の過程②：情報の収集</b> <b>仏像への疑問について調べよう！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会科で仏像には先人の願いが込められていることを知ったよ。先人の悩みや苦労についてタブレットで調べよう。</li> <li>・インターネットでは分からない仏像の種類があったよ。美術館の学芸員さんやお寺の住職さんにZoomで聞いてみよう。</li> <li><b>修学旅行</b>で古都の寺院や仏像を見よう</li> <li>・仏像を守るために奈良・京都ではどのような取り組みが行われているか、実際に見てみよう。</li> </ul>	<p>貴族による国づくりと国風文化</p> <p>貴族(藤原氏)に中心の政治の中で、遣唐使が廃止され、日本風の文化が流行したことを理解する。(作例：平等院阿彌陀如来像、浜松市内の定朝様式を示す各如来像)</p>	<p>子供たちの質問への回答 Zoomを活用し、教室と寺院・地域をオンラインでつなぎ、子供たちがさらに疑問に思ったこと、確認したいこと(主に宗教的な事柄、文化財保護に関する苦労等)について、回答する。</p> <p><b>修学旅行事前学習</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寺院を訪れたり仏像を拝観する際のマナーやモラルについて</li> </ul>
<p>子供たちの質問への回答 Zoomを活用し、教室と美術館をオンラインでつなぎ、子供たちがさらに疑問に思ったこと、確認したいこと(主に学術的な事柄)について、回答する。</p> <p><b>学習発表会後の助言</b></p> <p>仏像を守るための作戦について、学術的な側面、美術館運営の側面から助言する。</p>	<p>仏像PRポスターを制作しよう</p> <p>仏像の存在、価値や魅力を多くの人々に広く伝えることを念頭に、図やイラストを分かりやすく美しく構成した「仏像PRポスター」を制作する。</p>	<p><b>探究の過程③：情報の整理・分析</b> <b>仏像を守るための作戦を考えよう！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仏像の状態を保ったり修理したりするには費用がかかるよ。お寺や仏像を見に来る人を増やす方法を考えてみよう。</li> <li>・まずは仏像の存在を多くの人に知ってもらわないと。魅力を広くPRしたいな。</li> <li><b>学習発表会</b>で学習の経過を発表しよう</li> <li>・美術館の学芸員さん、お寺の住職さん、地域のみなさんに発表を聞いてもらい、自分たちが考えている作戦についてアドバイスをもらい、修正しよう。</li> </ul>	<p>今日の生活につながる室町文化</p> <p>金閣や銀閣等の建造物が現在まで保存されていること、銀閣の書院造は現在の和風建築に生かされていることを知り、歴史的文化的文化財と現在の私たちの生活がつながりに気付く。</p>	<p>子供たちの質問への回答 Zoomを活用し、教室と寺院・地域をオンラインでつなぎ、子供たちがさらに疑問に思ったこと、確認したいこと(主に宗教的な事柄、文化財保護に関する苦労等)について、回答する。</p> <p><b>学習発表会後の助言</b></p> <p>仏像を守るための作戦について、宗教的な側面、寺院経営の側面から助言する。</p>
<p>作戦実行への協力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美術館(展覧会)運営のノウハウ(広報、イベントの実施等)について、子供たちの必要感に応じて助言する。</li> <li>・子供たちが作成した広報物の掲出、SNS拡散</li> </ul>	<p>建築や庭園等の魅力を味わおう</p> <p>仏像所有の寺院の建築や庭園、仏像以外の文化財(絵画等)のよさや美しさを味わおう。</p>	<p><b>探究の過程④：まとめ・表現</b> <b>仏像を守るための作戦を実行しよう！</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図工で作った仏像PRポスターをお寺や公共施設、観光案内所に貼ろう</li> <li>・お寺や駅で仏像の魅力をPRするイベントを開き、報道機関に取材してもらおう。</li> <li>・SNSやYouTubeを使った広報をしよう。</li> </ul>	<p>国や地方公共団体の政治</p> <p>国民の願いを実現する政治の働きについて、予算や選挙のしくみを含め理解する。</p>	<p>作戦実行への協力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寺院経営のノウハウ(広報、イベントの実施等)について、子供たちの必要感に応じて助言する。</li> <li>・子供たちが作成した広報物の掲出、寺院敷地内での催しの実施の許諾</li> </ul>

図8 美術館と学校の連携による地域の仏像を取り扱う学習モデル(試案)

## 5. おわりに

仏像という主題には、総合的な学習の時間を要とし、特別活動の諸活動やねらいを連動させ、各教科（図画工作科・美術科、社会科）を横断することで、「地域（郷土）の文化（芸術・歴史）を理解し、それらに対する愛着を高め、守り伝えようとする」と各教科・領域で育む資質・能力の共通項として見出すことができた。この資質・能力の共通項の育成を目指し、各教科・領域で習得した知識を総合的な学習の時間における探究の過程において相互に関連付けながら活用し、情報を精査したり、探究課題の解決策を創造したりすることを通して、「深い学び」が具現できるものとする。加えて、仏像を通して子供たちの資質・能力を育む「深い学び」の具現には、地域に伝わる古の仏像の「実物」と対峙、美術館学芸員や寺院住職等、地域の人材との継続的な対話と支えが必要不可欠である。以上を踏まえ、地域に伝わる仏像に関する「教科等横断的な学び」の可能性について、具体的な試案を提示することができた点は、本論における一定の成果といえよう。

この試案は、みほとけ展にて複数の教科・領域の「見方・考え方」から仏像の「実物」に対峙した子供たちの表れをベースに、総合的な学習の時間の探究の過程を柱に各教科・領域（図画工作科・社会科・特別活動）の学びが有機的に連動する形で構想されていることが特徴といえる。こうした学校における総合的な単元構想に、学校（教員）と美術館（学芸員）・寺院（住職・地域）の連携を軸にした美術館における教育普及プログラムが内包されていること、「子供たちに資質・能力の共通項を育む」という共通理解が図られた美術館学芸員や寺院住職が両輪となって学びを継続的に支える構造となっている点も特筆され、本論における提案の独自性と新規性、有用性を高めるものといえるのではなかろうか。

また、この試案は、本論で主張する「美術館（学芸員）と学校（教員）の連携を軸にした美術館における教育普及プログラムの可能性」の根底にある、図画工作・美術科という教科そのものの学び、学校の美術館利用の価値や必要性を再認識することにもつながったのではなかろうか。仏像という主題は、「造形的な見方・考え方」からアプローチで資質・能力を育成する図画工作・美術科の本質的な学びの側面を十分に見出しながら、他教科・領域との「教科横断的な学び」の中での立ち位置と役割、他教科・領域で育むべき資質・能力との共通項を明確にした。美術館としては、図画工作・美術科に留まらない他教科・領域の学びや「教科等横断的な学び」における学校の美術館利用の可能性、学校や地域との継続した連携が子供たちの学びへ寄与できる可能性を具体的に提案することができた点は意義深いものといえよう。

筆者は、今後も地域に伝わる仏像の調査研究を継続していく。その成果は、教員経験で培った視点を意識した教育普及プログラムの開発・提供による資質・能力の育成という形で、地域の子供たちに還元していきたいと考える。いずれ地域の仏像を展示する展覧会を再び開催することができたならば、学校、美術館、寺院（地域）、そこに関わる人材を総活用し、「子供たちに資質・能力の共通項を育む」という共通理解をもとにした「博学連携」体制を構築しながら実践を継続し、より具体的な成果を創出したい。同時に、本論で提示した試案を全国の美術館・博物館、学校等で汎用的に活用できるよう、プラットフォーム化を視野に精査していきたい。

### [註]

- 1) 島口直弥「学校の美術館活用を促す教育普及プログラムの開発ー西洋絵画展における実践を中心にー」『美術教育』日本美術教育学会、2019年、pp. 94-95
- 2) 島口直弥「学校の美術館活用を促す教育普及プログラムの開発②ーコロナ禍の美術館における『主体的・対話的で深い学び』の可能性ー」第71回日本美術教育学会学術研究大会瀬戸内大会研究発表、2022年

- 3) 島口直弥「自分自身を取り巻く環境に対する豊かな感受性を高める教科指導—図画工作科からのアプローチと子供の変容—」『静岡の教育—教育研究静岡県集会報告—』静岡県教職員組合、2016年、pp. 188-199
- 4) 工藤麻耶「社会や生活とのつながりを意識した有機的カリキュラムの開発に関する研究—図画工作科・国語科の教科連携を対象として—」『教育実践高度化専攻成果報告書抄録集』（静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻、2018年、pp. 43-48）において、教科連携授業の構想時に特にポイントなのが「教科ごとの資質・能力と共に、教科共通に働く資質・能力を明確にしてカリキュラムを段階的に構想することである」としており、図画工作科と他教科の「教科等横断的な学び」の先行研究として注目される。
- 5) 島口直弥・大宮康男「遠州地域に伝わる平安・鎌倉・南北朝時代の仏像」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇』静岡大学学術院教育学領域、2021年、pp. 109-120
- 6) 田淵五十生・谷口尚之・祐岡武志「世界遺産教育の教材化の視点と実践報告—「古都奈良の文化財」と「法隆寺地域の仏像建造物」を中心にして—」『教育実践総合センター研究紀要 (17)』（奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター 2008年、pp. 289-297）では、身近な地域の文化遺産、将来に残したい地域の自然景観などと結びつける学習過程を組むことによって、地域に世界遺産を持たない学校でも世界遺産教育が可能であることが言及されており、地域の仏像の教育活動への活用に関する本論の先行研究として注目される。
- 7) 有田洋子「日本美術の諸様式を言語化して理解させる鑑賞教育方法：キャッチフレーズによる仏像様式の鑑賞」『美術教育学 (34)』（美術科教育学会学会誌編集委員会 2013年 pp. 33-47）他、図画工作・美術科における子供の仏像鑑賞について継続研究の成果が発表されている他、新関伸也・松岡宏明「薬師三尊を他と比べてみると」『ループリックで変わる美術鑑賞学習』（三元社 2020年、pp. 76-77）では、薬師寺像（国宝）を題材に、材料、技法・様式の意味や特徴を捉えさせる学習指導モデルを例示している。
- 8) 京都市立芸術大学美術教育研究会『美術資料』（秀学社 2021年）には、薬師寺の釈迦如来像、東寺の大威徳明王像、広隆寺の半跏思惟像、興福寺の阿修羅像や天燈鬼像と、いずれも旧都寺院所蔵の国宝の仏像が紹介されている。（pp. 100-101）なお、同書の静岡県版「静岡 Re+」（著者：鈴木光男・八木千景・寛有子・島口直弥）には、「みほとけのキセキ—静岡の仏像にみる『日本の美』—」と題し、巻頭にて遠州地域に伝わる仏像について、尊格の分類や制作年代による様式の違い等、仏像鑑賞を楽しむ方法が紹介されている。
- 9) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編」文部科学省、2017年、p. 96
- 10) 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」文部科学省、2017年、pp. 106-107
- 11) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」文部科学省、2017年、pp. 106-107
- 12) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」文部科学省、2017年、pp. 73-75
- 13) 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」文部科学省、2017年、p. 21
- 14) 大河内智之「仏像の移動とその実態—彫刻資料から地域史を読み解くために—」『和歌山県立博物館研究紀要 第19号』和歌山県立博物館 2013年、pp. 1-18
- 15) 大河内は「博物館機能を活用した仏像盗難被害防止対策について 展覧会開催と「お身代わり仏像」による地域文化の保全活動」『和歌山県立博物館研究紀要 (25)』（和歌山県立博物館 2019年、pp. 33-35）において、仏像のレプリカを3Dプリンタで作成し、博物館（学芸員）と、近隣の大学や高校との博学連携を通しての仏像の未来継承への取り組みについて報告しており、本論における実践の参考事例として注目される。

- 16) 山岸公基・青木智史・大山明彦・金原正明・小山聖美・馬場翔子「先進機器を用いた文化財調査とその教育的活用—次世代教員養成に向けた新たな取り組み—」『次世代教員養成センター研究紀要』（奈良教育大学次世代教員養成センター 2015年、pp. 145-153）では、文化財調査の成果を3Dプリンタで複製した仏像の展示という形で伝統文化を発信する取り組みを紹介しており、小・中学生の探究課題解決策にも応用可能である。また、山岸はこの取り組みについて「美術教育のみに限定されない教科横断的内容をもつ」としている。
- 17) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」文部科学省、2017年、pp. 124-126
- 18) 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」文部科学省、2017年、pp. 97-98、pp. 101-102
- 19) 島口直弥「地域の文化財の価値と魅力を広げ深める展覧会事業の具現—『みほとけのキセキ—遠州・三河の寺宝展—』の『展示』と『広報』の事例から—」『静岡県博物館協会研究紀要 第45号』静岡県博物館協会 2021年、pp. 24-31
- 20) 島口、前掲論文1、2019年、pp. 94-95
- 21) 「幼稚園教育要領解説」文部科学省 2017年、p. 190
- 22) 島口、前掲論文19、2021年、pp. 24-31
- 23) 美術館で仏像を鑑賞することは、特別活動の学校行事「文化的行事」にも該当する。「児童の手によらない作品や催し物を鑑賞する行事」の具体例として示される「美術館見学会」、「地域の伝統文化等の鑑賞会」に該当するものである。（「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」文部科学省、2017年、pp. 121-122）